



コロナ禍での 日本語ボランティア活動の状況

～「hiroba」アンケートからの情報を中心に～

1 はじめに

2020年11月13日発行のネットワークニュース111号では、7月末時点で日本語学習支援を行っている教室の状況について13名の運営委員へのメールによるアンケート調査結果をお伝えしました。

今号では、約3ヶ月が経過した11月8日に、メーリングリストhirobaに参加登録している42教室とhirobaに参加していない4教室の計46教室に、「コロナ禍での日本語学習支援活動への影響と対応、今後の活動について」を伺うアンケート調査を行い、28教室から回答が寄せられました（回答率60.87%）。

調査結果を整理し、その中から代表的な取り組み、考えを紹介します。紙面の関係で、いただいた回答の全てをご紹介出来ないこと、又、要点のみをご紹介していることをご了解下さい。

2 教室活動の状況

学習者とボランティアの参加の状況は、学習者は、以前に比べて半数から2/3、支援者は、コロナ以前に比べ7割程度の割合で減少した教室もあります。

3 オンライン支援の取り組み

殆どの教室が対面による教室活動を休止し、新たにオンラインを利用した学習支援が増えました。

以下オンライン学習支援について回答を戴いた事例を中心にをご紹介します。

(1) オンライン支援について教室としての考え方や方針は何か

「対面支援に代わるものとして継続していく考えです」や「学習者の多くがリモートワークになり、オンラインの方が都合が良い」という肯定的な考え方がある一方、「オンラインは対面活動が制限され

ている間の暫定的手段」や「会員同士の繋がりを維持するため」で、対面での活動が基本と考える会員も多いです。又、「文字指導や、概念の指導などが難しい」ことや「『保育付き日本語支援』を行っている関係で、保育希望の学習者にはオンライン支援は意味がない」ことなどから、オンライン支援を限定的に考える会員もいます。

(2) オンライン支援を実施している場合、いつからどんな目的で始めたか

「学習支援の継続」や「会員相互間、支援者と学習者の関係維持」を目的に、オンライン支援を始めた教室や、学習者からの希望で始めた教室もあり、傾向としては、学習者からの希望を取り入れて始めたケースが多いようです。時期としては、早い教室では昨年4月から始めています。

(3) オンライン支援の実施方法や状況について

基本的には、支援者の裁量によって行われているケースが多いように見受けられます。パワーポイントを活用したり、オンライン教材を利用したりして対面に近い活動をしている支援者もいれば、会話中心の支援をする支援者もいて、其々が工夫して活動している印象です。

(4) オンライン支援を実施している中での課題・問題点は

①技術・経験について：

技術的な問題は、簡単に対応出来た支援者と、対応が難しく感じられた支援者に分かれたようです。どちらも、オンラインでの学習支援方法に慣れていない故の戸惑いや悩みが多いようです。又、教室の休止が長く続くようであれば、オンライン支援のための技術指導が必要になるという意見もありました。

②器材・環境について：

居住環境によってオンライン支援が受けられない学習者が出てしまう。又、機器の不具合が生じることがある。

③資金・費用について：

オンラインのために何も購入していない、会場費が要らなくなったなどの理由で、費用は変わらないという意見がある一方、「オンライン授業にかかる費用について、大きな規模で調査する事を提案します。オンライン支援にはお金が掛かります。経済

的な理由で日本語学習の機会を失ってしまう人が出ないようにするためには行政からの支援が必要です」という意見も寄せられています。オンライン支援にかかわる費用について考え方の違いが出ていると思います。

④参加費の徴収について：

オンライン支援を行った場合、参加費を徴収する教室としない教室に分かれます。参加費を「日本語学習支援の対価」と考えている教室は徴収する、参加費は「会場費や雑費などを学習者に負担してもらう」と考えている教室は徴収しない印象です。

(5) オンライン支援について今後の考え

①積極的に取り組んで行く

「オンライン支援を希望する学習者とスタッフには継続してもらう」や「暫定的にオンライン支援を始めたが、時間の経過と共に、オンラインの方が良いという学習者が増え、現在は全員がオンライン支援を強く希望しているので、支援者の意向とは反対に、オンライン支援を継続します」など、ここでも学習者の希望が先行しています。

②オンラインの利点

移動時間の節約、何処からでも参加できる、外出できない時でも参加できるなど、オンラインならではの利点に気づき、支援活動の広がりが感じられます。

③教室活動が基本、オンラインは当面の対応

「オンラインは、学習者の表情や声のトーンなどが読み取れず、情報量が限られると同時に、メンバー全員参加の交流活動が出来ず、限界を感じる」や「基本が1対1の対面で活動している」、「対面支援が最良」などの理由で、オンラインは暫定的な手段と考える教室は一定程度あります。只、「オンライン支援を経験してみて、やり方によっては対面と同じように出来ることが分かれば、見直すこともある」という意見も出ています。

④講習希望

「日本語ボランティア複数団体に向けたオンライン講習実施、研修などがあれば積極的に参加したい」

4新しい生活様式で、今後の活動をどのように考えるか

①学習支援の方法

「一定の安全が確保できれば対面での学習支援を行いたい」や「対面支援にこだわっていきいたい」といった、対面活動にこだわった活動を目指す教室もあれば、「オンライン支援の利点を確認できたので継続の意向です」や「ニーズがある限り(対面支援が可能になっても)オンライン支援も継続させる」という教室もあります。

②状況次第

状況が変わらない限り、現在活動している教室は、それぞれの活動方法が続けるしかないというのが基本的な考え方です。又、今まで通りの生活が出来るようになるまで、感染状況を見ながら、都度、活動について判断するという意見もあります。

③その他

「新しい生活様式での継続は十分可能と思われるが、リスク許容度や感じ方は人によって違うので、教室継続が自己目的化して各人を縛ることがないよう気を配っている」という意見があります。

5活動を継続していくのに、望まれる支援

①行政への要求

「新規生活者としての外国人入国までの道のりは長く、参加者数によっては、区はこの事業を終了してしまうかもしれない。『日本語教育の推進に関する法律』の実現にむけて、区の窓口がどこかも明白でない段階である」、「区、都国際交流委員会、都生活文化局などに対して：リモート・オンライン日本語支援のためのスキル講座を開催して欲しい」、「これまで、区の施設を利用して活動してきましたが、活動再開となった場合には、施設の感染防止対策の配慮、協力を望みます」、「区に対して：活動場所を、優先的に恒常的に提供して欲しい」

②情報が欲しい、大切だ

「江戸川区では日本語ボランティア連絡会があり、代表が2ヵ月毎に集まって情報交換しています」、「私たちと同じように日本語教室を開催しているグループが、更なる感染拡大にどのように対応しようとしているのか、情報を提供していただきたい」、「コロナ禍の中、オンラインに変更するなど、活動の手法を変えた団体もあると思う。それらの団体の詳しい状況について知りたい」、「十分に対策を検討して教室を再開したが、ここまで感染者が拡大してくると、この対策でよいのか不安である。市の施設を借用して活動しているため、自分たちにできることにも限界がある。残されたことは教室の再度の休止くらい。私たちと同じように日本語教室を開催しているグループが、更なる感染拡大にどのように対応しようとしているのか、情報を提供していただきたい」

③施設・場所・器材

「人数制限のために入室できない学習者がいる、教室使用許可がまだ出ない教室もあるため、新たな活動場所を近辺に得られるならありがたい」、「教室として使用していた施設の収容人数が半分になってしまっているため、教室を再開すると赤字が出る可能性がある、そこは問題だと思っている」、「活動施設のWi-Fi設置、資金調達の検討」

④資金等

「人材を集めうる資金、安全な運営をするための広い教室等希望します」、「経済的な理由で日本語学習の機会を失ってしまう人が出ないようにするためには行政からの支援が必要です」

⑤他の団体との連携・交流

「意見交換を目的とした他団体との交流」、「オンライン学習で、教室の垣根を越えて連携して、私たちの教室のオンライン学習に参加して欲しい」

6まとめ

2021年を迎えて新型コロナウイルス感染は更に拡大し、日本語学習支援活動にも影響が続いています。

昨年3月からオンライン支援に切り替えた教室もあれば、対面での活動を再開したものの感染再拡大により再び休止した教室や、状況を見ながら休会を続けている教室もあり、それぞれの教室は、このコロナ禍の中で、運営に戸惑っている現状が見えます。

一方、今回のアンケート結果から、教室活動は、LINEなどを活用した情報交換や、オンラインでの学習支援が行われるようになりました。

2021年は新しい生活様式の下、日本語学習支援活動の行く先を決める年になると考えます。

(文責：梶村)

英語に不慣れな私の “迷場面”

日本語教師 金子広幸

コロナの話ではつまらないので、アメリカという1つの言語社会で、私がどのように四苦八苦したかお聞かせして、笑っていただこうと思います。

その前に私の話を少し。私はもちろん日本生まれ東京育ちの日本人ですから日本語が第一言語です。

その日本語を除くと、私にとって大きな存在は中国語です。台湾で学んだ中国語は人生のいろいろな場面で私を支えてくれました。

そして3つ目にあげる言語が英語です。これをお読みの皆さんと同じように私も中学校から英語に触れていますが、苦手意識を払拭できていません。日本語や中国語では人の感情をとらえる的確な表現が選べるのに、英語ではそれができません。また人の話を聞いていてもおぼろげながらにしかイメージが育めず、いつも悔しい思いをします。い

わゆる“日常会話程度”というわけですから、込み入った状況になると話せません。…これでもそれなりにクラスや仕事でも使えるように学んできたつもりですし、英語でプレゼンもするようになったのに、体に合わないというか…。

それ以外の言語は、全て片言ですが、比較的ちゃんと使えるものから順番に、台湾語、韓国語、フランス語(?)、ロシア語(??)が挙げられます。仲良くなった人たちが私をからかいながら、一生懸命教えてくれました。どれも楽しい思い出があります。

台北のホームステイ先で、週末に大家さん達と食事をする時、じゃんけんで話す言葉を決めていたので、私が負けると台湾語になりました。初め食事中は無言でしたが、おかげで?使えるようになりました。韓国語は、大学院で同級生だった韓国の留学生たちが直接法を学ぶための模擬クラスを作って、3ヶ月特訓してくれました。フランス語は独学、第2外国語だったロシア語は今ユリア先生とオンライン特訓中!

どの言語も楽しい思い出がつくと学習が弾みます。楽しいこと

は大切です。

さて、それでは英語に戻りましょう。

アメリカといってもニューヨークとフロリダしか知りませんが、私があちこちの場面で英語を使うとき、どのようになったかご紹介しましょう。

この辺が今回のポイントです。金子の体験を、皆さんの身の回りにいる外国人市民に当てはめ、日本語社会の中でどのように感じながら日本語を話しているかを、想像していただきたいのです。

まず、金子を客観的に見て、どの程度ストレスを感じていたか考えてみました。

●はしよるストレス

状況をしっかり説明して、自分の希望を叶えたいと思っても、英語だと十分に伝えられず、話をはしょってしまいます。ちゃんと話せるように意識すると、頭の中で初めからやさしい英語で考えることになり、結局話をはしよることになるんですね。

普段はよく話す私がこうせざるをえないと思った時最初のス

トレスを感じました。

●よく話す人のストレス

何度も登場する台湾人の息子(実の息子ではない!) BJは寡黙で、口の重いタイプです。語学教師の私から見るとこの人は本当に英語で話しているのか疑いたくなるほどです。何せ日本語はなかなか話してくれませんから。

日本語なら口八丁・手八丁、よく話す私は、英語で十分に自分の言いたいことが言えないと辛くて、そんなBJのそばにいたとなおさらでした。上に書いたこととは異なるタイプのストレスでした。

●周りの目のストレス

BJはアメリカで医師ですから、英語は流暢なはずですが、私と彼とは普段中国語で話していますから、彼の前で、私が苦手な英語で話すことがストレスになりました。

人は、話す相手によって言語を決めているのだと思います。関西の人は、普段は標準語でも、関西人同士で話す時は関西弁だったりしますものね。

ある時のことです。BJの日本滞在が終わり、彼を成田空港に送って行ったら、たまたま私の親友H山さんがいて、3人で食事することになりました。私の苦痛、想像できますか? 普段H山さんとは日本語、BJとは中国語。それなのに私は彼らの前で3人の共通言語英語で話さなければならなかったんです。この上なく、恥ずかしかったです。

発音や言葉の選び方・文法でもそうですが、不慣れな英語で話すと、イングリッシュスピーカー風の中途半端なジェス

チャーがついたり、表情がアメリカンムービーの俳優のようになったりして、ますます気恥ずかしい!

え? 金子も恥ずかしいことがあるのか、ですって? あるに決まっています!

私の嘆きはこのくらいにして……。では、どうやってやり過ごしていたかですが……

●コミュニケーションをBJに頼りつつ、自分も話す。

BJと2人で出かければ交渉は全て彼に頼ることになりました。スーパーのレジ、ショッピングモールでものを探す、お土産屋さんで値段を交渉する、レストランで注文するなどBJがそばにいと、私はほとんど英語を話さなくなっていました。日本にいる外国人市民・学生はよく連れ立って、群れて行動していますよね? その気持ちよくわかります。

ところがだんだん状況が変わりました。そこはアメリカですから英語が分かる第三者がいれば話が盛り上がり、BJもよく話してくれて、楽しい思いをしました。するとBJも助けてくれて、二人で話すときも自然に英語になる時があって、ストレスは軽減しました。

何度も行ったので仲良くなったニューヨークのお土産屋さんでは、私がBJの目を気にせず、英語でどんどん話すようにしたら、面白いと思ってくれたのでしょう、お茶まで出してくれました。

つまり、どこかで話し始めるきっかけがあることが大切ですね。地域支援の皆さん、楽しく

話し始める機会を作ってください。

●不慣れだと言ってしまうことが救いになる。

ニューヨークでは、やりとりを始める前に「私にとって英語は不慣れな言葉だから、助けながらコミュニケーションしてくださいね」と前置きしてからその人とコミュニケーションを始めました。これは効果があって、相手が十分に私の立場を尊重しつつ話してくれました。また、その他の場面でも、もちろん人によりませんが、英語に不慣れな私の立場をよく理解してくれる人を選びました。この辺は30年以上前に台北でご近所の人とのつながりを作るときに得た感覚です。つまり、地域の日本語支援をしているみなさんも、日本語に不慣れな人に対応できるように集まっている人たち、という意味で、“選ばれている”ということになりますね。また支援される立場から見ても、「この人たちの前では多少間違っても大丈夫だ」と安心できることは大切です。

同じ方法をフロリダでも試しましたが、こちらは田舎でしたから、同じコミュニティの人がほとんど話しかけてきてくれました。最初はとても勇気のいることでしたが、安全には充分配慮しましたが、それでもあっという間に友達ができました。

地域支援をされるみなさんには、外国語の能力は必要ありません。でも、日本語に不慣れな人のことを、金子のこの体験記から想像して下さったり、ご自身も少しでも外国語にチャレンジしたりして、その人の気持ちを実感なさってくださいね。

「LTC友の会」

副代表

山形

美保子（杉並区）

日本語ボランティアの現場から

このコロナ禍、「新しい日常」の中、私たちも新たな在り方を探しました。LTC友の会は杉並区の阿佐ヶ谷と高井戸で5教室を開いてきましたが、2020年2月末に感染拡大で教室会場全て利用停止となりました（その時点でボランティアスタッフ27名、学習者55名が在籍）。その後、密を避ける形での教室再開を待っていましたが、4月になって学習者、特に初級レベルの人たちが日本語に接する機会を得られるようにとオンラインも選択肢の一つと考えました。

そのためにまずスタッフと学習者に、オンラインで参加するか、教室再開まで待つか、再開となった場合の希望する教室時間帯の調査を実施しました。その結果、スタッフ11人からオンライン参加の申し出がありました。学習者にはやさしい日本語・英語・中国語で調査用紙を送付したところ、41人から返事を得、そのうち27名がオンライン受講を希望しました。そこでスタッフと学習者の組み合わせをし、両者の都合のつく時間と手段でのオンライン支援が4月末からスタートしました。

LTCの教室時間は一コマ90分ですが、初めて経験するオンライン、90分継続できるのか不安もあり、30分でも45分でも疲れないう程度に始めてみようということにしました。手段としては、ライン、スカイプ、ズーム、Teamsなどですが、原則としては顔を見ながら話しましょう、ということに。またこれらツールの使い方をスタッフ間で試し、文字の入力法や画面共有などの確認もしました。また小ぶりのホワイトボード、端末機器用スタンド、マイク付きイヤフォンなどを購入したスタッフも多くいました。

こうしてオンライン支援が始まりましたが、それに当たり注意したことはスタッフ学習者双方のWi-Fi環境でした。ネット契約の状況によっては高額な料金が派生するかもしれないからです。中には1回のビデオ通話で

学習者側の1ヶ月の契約上限まで達してしまい、その月は音声のみで実施したとの報告もありました。後にこの学習者は契約変更をして支障なく会話ができるようになりました。また、LTCはわずかですが受講料をもらっています。これもネットバンキングやATM振り込みで問題なく集金できています。

ここで気がかりだったのは、アンケートへの返信がなかった学習者です。無事に生活しているのか、状況が理解できているのか心配でした。またオンラインを希望せず（希望できず）教室再開を待つと回答した学習者は、オンラインができない住環境にいるのだと。私たちにはどうすることもできませんが、とにかく「できる人ができる時にできる事」のもとで行動するしかありませんでした。

その後、6月に教室会場が小学校の開放教室を除き使用可能となり、対面式教室が再開。オンライン学習ができなかった人を優先して受け入れました。スタッフの中には家族や自身が高齢、基礎疾患を持っているなどで、オンラインなら継続可能という人も。12月まで開いていた教室（スタッフ20名学習者40名）も、2021年1月に再度緊急事態宣言が発令され、現在（2月末時点で）はオンラインのみです。

オンライン支援を取り入れてよかったのは学習者もスタッフも孤独にならずにすむということです。週一おしゃべりをしてお互い元気な顔を見る、これが何よりです。そして在宅ですから、「ジュディ」と名付けたウーパールーパーや、栽培中のミニトマトを見せてくれる学習者もいます。どこにいてもWi-Fiがあれば話せます。年末にオンラインパーティーをしましたが、北京の実家から、フランスの自宅から、夏のモーリシャスから、そして新幹線で移動中の車内から参加してくれた学習者もいました。環境を整えればリモートで繋がることのできる、この絆を大切にしたいと思います。

やってみたら、いい面が見えてきたオンライン学習

「にほんごクラブ・ゆう」代表 片岡 典子（江戸川区）

効用でした。

直接会えなくても学習者とながらることができたオンライン学習。やってよかったと思います。

江戸川区では2019年から「日本語ボランティア連絡会」を立ち上げ、連携を深めてきましたが、コロナ禍ではそれも役立ったと感じます。毎年開催していた「日本語発表会」をいくつかのグループに分けてオンラインで行った団体や、学習者同士の交流の場として「ZOOMお茶会」を開催している団体など、それぞれ工夫して進んだ取り組みをされていることを知りました。オンラインの可能性はますます広がりそうです。

にほんごクラブ・ゆうは学習者とボランティア合わせて約30名。新型コロナウイルスの拡大により、4月から教室活動を休止し、5月からオンライン学習を始めました。私自身、オンラインは未経験でしたが、「緊急事態宣言下で学習者はどう過ごしているのか」、「雇止めにあってははいないか」と心配になって提案したところ、幸いなことにボランティアほぼ全員から参加希望があったのです。活動休止中にもやり取りができたのはLINEグループで欠席・遅刻を連絡するシステムができていたからで、これは後々も大変役に立ちました。

使っているツールはZOOM、スカイプ、LINEのビデオ通話など、ボランティアによって様々です。特にZOOMは画面共有やホワイトボード機能などが使え（美肌補正機能まで！）、慣れれば操作も簡単でした。

オンライン学習を始めるにあたって課題として挙げたのが、団体としてのまとまりをいかに保つかでした。それぞれが個人商店のようになってしまい、クラブとして成立しないのではないかと…。それを解決してくれたのもLINEグループでした。

「ノート」機能を使って毎回、学習の日時と内容を書き込むことで、スタッフ全員の活動が見えるようになりました（写真）。また、オンラインのスタッフミーティングで近況報告やお勧めの日本語学習サイトなどの情報交換も始めました。顔を見て話をするとホッとします。

「みんなの教材サイト」、やさしい日本語を使った「NHK NEWS WEB EASY」、生活者としての外国人のための「つながるひろがる にほんごでの暮らし」、技能実習生のための日本語「みどり」などなど、それぞれの学習者に合った無料の学習支援サイトを活用できるのはオンライン学習の利点です。また、国に帰った卒業生達から「私も参加できませんか」と連絡をもらい、帰国後のサポートができたことも思わぬ副

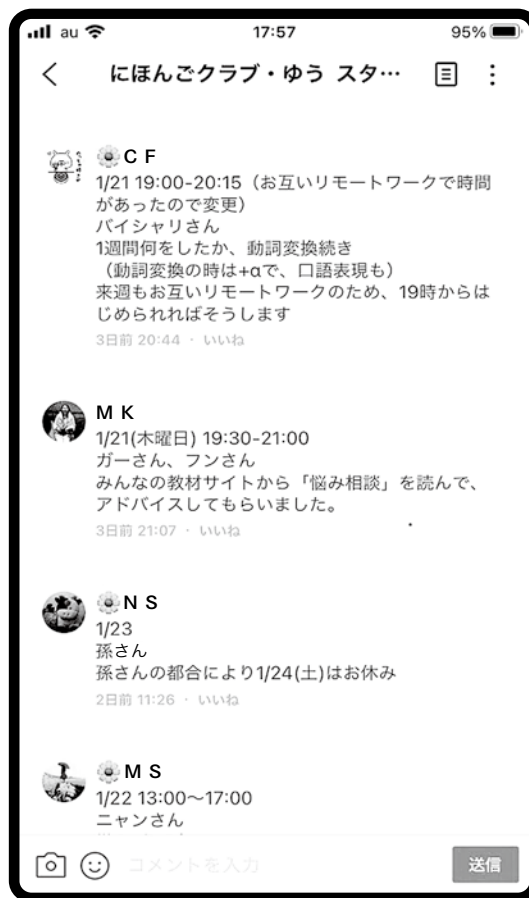


写真:LINEグループのノートで活動内容を共有

●第28回定期総会について

前年度の総会は、コロナ禍のため、初めてオンラインによるものとなりましたが、コロナ禍の収束が期待できない現状、再びオンラインによる総会を開催いたします。

会員の皆さまにはご迷惑をおかけしますが、ご理解いただき、ご協力くださるよう、よろしくお願いいたします。なお、ご連絡先（メールアドレス）をご変更、または新設なさった場合は、至急、下記にご連絡ください。TNVN (office@tnvn.jp) よろしく願いいたします。(事務局：林川)

◆新会員紹介

次の2団体が賛助会員として、入会していただきました。

○Coto World 株式会社 渡部 由紀子

私は1997年から2004年まで「日本語グループWAIWAI」というボランティア日本語教室で活動していました。土曜日の活動に参加する会社勤めの学習者の方が、プロから日本語教育を受ける機会がないと困っているのをみて、2000年にメンバー4人で小さな日本語学校を作りました。今では飯田橋、麻布十番、横浜に拠点があり、合わせて5000人を超える方が私たちの学校で勉強したことになります。21年目となるこれからも日本に住む優秀な海外の方が自分らしく豊かに暮らせるようサポートしながら、今後はもっと海外に向けて日本のすばらしさを発信していきたいです。

○World Credit Investment 株式会社ライフサポート事業部「Rich One」田村 啓

「人生をもっと楽に、みんなが住みやすい日本へ」このテーマのもと、ライフサポートを主体としたアプリを作成します。在日、訪日外国人の方が生活する上で必要なこと、携帯、不動産賃貸、就職、保険の加入、面倒な役所手続きなど、皆様のリアルな声をお聞きして、本当に必要なアプリを作っていきます。まずは、我々のLINE@に加入して、ご意見をお聞かせください！



Column 「スーパーで」

最近、コロナ禍のせいで、現金を使わないようにしています。でも、レジで「クレジットにされますか？」と聞かれると、「はい。」と答えながらも、「やっぱりクレジットは使われたくないのかなあ？」と一瞬、勘繰ってしまいます。(もちろん敬語を使ってくれたんだとわかりましたが…。)

店員は手引書に従って、お客さまに対応しているのでしょう。それなら、手引書に「クレジットになさいますか？」と書いてほしいです。間違いなく尊敬語とわかりますから。けれども、お客さまとしては、「クレジットにしますか？」でも十分なんですよ。(RH)



東京日本語ボランティア・ネットワーク (TNVN) は都内のボランティア日本語教室のネットワークで、会費と有志による寄付により運営している民間の団体です。会員は日本語学習支援活動を通して、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人を、隣人として支援しています。又、TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆日時：毎週金曜日午後2時～4時
第5金曜日／休み

◆場所

東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線ー出口B2b)飯田橋駅下車
セントラルプラザビル 10F ロビー

◆日本語ボランティア相談窓口

日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフが応えています。メール・電話でご確認の上、気軽にお越し下さい。また、メールでのお問い合わせにもお応えしています。ご意見もお待ちしています。

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1

東京ボランティア・市民活動センター

メールボックス No.4

◆TEL：03-3235-1171

(呼出：金曜日活動時間帯のみ)

◆FAX：03-3235-0050

◆E-mail：office@tnvn.jp

◆URL：http://www.tnvn.jp/

◆郵便局払込

口座番号：00100-1-719259

加入者名東京日本語ボランティア・ネットワーク

◆会員数 (2021年3月12日現在)

正会員：88団体

個人協力会員：16名

賛助会員：5団体

◆編集／岡田 美奈子、小川 伶子、梶村 勝利、佐久間 雅子、神 歩、床呂 英一、林川 玲子、山内 真理

◆レイアウト／美巧社